

---

.hack//G.U.-降誕-(.hack//G.U.)

空の下

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

・hack//G・U・-降誕-（・hack//G・U・）

### 【Nコード】

N2698D

### 【作者名】

空の下

### 【あらすじ】

第二次ネットワーククライシス、『The World』の女神『Aura』の行方不明度重なるネットトラブルから1年CC社の催す第二の『The World』そこへ第二次ネットワーククライシスよりネットを遠ざけていた少女がまた舞い戻るその身に宿した『力』と数多の出会いが交差する物語の序曲これは長く続く旅路、その『始まりの物語』

## 降臨（前書き）

作者はP S 2ソフト「h a c k / / G ・ U ・」しかプレイしていません。

その他の小説、アニメ等は拝見しておりません

上記の事情によりオリジナル要素・独自設定等が多数ある事とかわれます

「h a c k / / G ・ U ・」原作をこよなく愛する方には禁忌となるやもしれません

尚この小説はオリジナルの主人公の話となります

以上の事を承知された上で構わないと言われる方は、駄文ではございますが私の作り出した『The World』をお楽しみください

## 降臨

The World R:2

目の前に映し出されるタイトルに知らず動悸が脈打つを感じる  
前作のデータを引き継がないのは残念だが、それでも私は『The  
World』と言う世界がとても好きだ。美麗な景色は心を奪い、  
流麗な旋律はリアルの疲労を癒してくれる

R:1 停止から3年、R:2 開始から2年経っているが今までの  
世界に入る事は一度としてなかった  
ここには辛い思い出がある。それでもあの子の愛した世界だ、あの  
子の言葉もあり再び私はこの世界に赴く

さてと、さっそくPCを作ろうか  
映し出されるキャラクター画面に前回とは違う「私」を生み出して  
いく

PC名:モルガン  
種族:人間、女  
職業:錬装士ノマルチウエポン

容姿はと…  
腰に届くほどの黒髪  
顔はまあ私をちょい美化した感じ、瞳は黒  
服装は白を基調としたドレスの上に鎧を纏わせる

今は貧相な感じだけど錬装士だから後々格好良くなるだろう

脈打つ心臓に蓋をし、久方振りの「The World」への扉を  
潜る

大分触って居なかったから本当に久しぶりだ

## 降臨

PCが構成されていく光景を眺めながら待つ事数分

ゲートに転送された私は目の前に在る扉に向かって歩く

ああ。この扉の先に新しい「The world」が広がっている  
のか

目の前に広がるのは懐かしい風景ではなかった、R:2になって町  
並みを一掃したらしい

私は今「悠久の古都マク・アヌ」にいる、恐らくは全ての人が初め  
に来る街

やっと私は帰ってきたんだな。

夕日に照らされた町並みはとても美しく。一步一步階段を下りていく石橋にの中程まで歩いた私は風に吹かれ髪の流れる方へと目を向ける眩いほどの夕日が私の目をさし咄嗟に目を瞑ってしまう、目を細めもう一度夕日を直視する

これこそ「The World」だ。現実と虚像の合間を揺れ動く仮想空間

女神の去りし世界と言うが、それでもこれ程に綺麗じゃないか。やはり戻ってきてよかった

「…お」

感傷に浸っていたらなんだか間抜けな声が聞こえた  
しかも私の真横で

せつかく良い気分だったのが台無しだ

しかも何か私の横から動かないときてる、何なんだ  
不機嫌も露に隣を見てみると黄色のPCが私を凝視していた、なにが面白いのか口も空きっぱなしだ……R：1時に比べマナー悪くなつてると聞いたけど確かにプレイヤーの質は下がっているみたいだ

「……」

「……」

「何か？」

何故か絶句している黄色のと睨み会っててもしょうがないので私から聞いてみる事にした

「いや、すまない。あんまりにも悲しそうに笑ってたから見惚れちゃってさ（^^;）」

「え？」

こんどは此方が絶句する番だった…

悲しそうに笑う？そんな事ないはずだ、私はこの景色に感動してる  
やはり「The World」だと再確認した所だ。その私が悲し  
そうに笑うなど有り得ない

「あれ？なんか悲しいのじゃなかった？」

「いや、悲しい事など無い筈なのだが…」

そう言いもう一度前方に浮かぶ景色を目に入れる

やはり、なにも私が悲しむような事象は見られなかった。目を焼く  
ような夕日も、私の下を流れる清流もどれもが綺麗だった。疑うべ  
くも無い嘗ての「The World」どれもが美しく、そのどれ  
にも…

ああ。そうか

「神の去りし世界……か」

しらず私の頬を水が流れ落ちる

「うえ！？ちょ、ちょっと…俺なんか不味い事言っちゃった!？」

見るも無残にうろたえる男は少々滑稽だが

それでも、私の頬を伝う静的な涙はしょうがない。これは私と世界  
の流す涙だ。如何にしてもとめる術は無いだろう

「いや、貴公は何も」

すまん。と返し。しばし涙の溢れるままに任せた

時間にして2分ほどだろうか、私は涙を流し、男は律儀に私の涙が  
止まるまで隣で立ち続けた

待っていてくれた男に振り向く

「すまん。貴公は何も悪くは無いよ」

「はあゝ。それじゃなんで泣いてたのよ（^^;）」

それを聞くのは男としてどうかと思うが…まあいいか

「ああ。この世界にはもう神が居ないのだと思うとな、自然涙が溢れた」

「へ？神？それは元から居ないんじゃないの？（苦笑）」

この男はR：1を知らないのか？

あの黄金時代を

「いや。確かにいたのだよ。

尤もR：1時代の話だがね。R：2になって世の荒廃に神は世界に愛想を尽かしたのかもしれんね」

「R：1時代か、懐かしいな。確かに黄金時代って言われてた時もあったな。神がどうのつてのは解らないけど確かにこの現状は愛想をつかされるかも（苦笑）」

頷く男はなにか閃いたのか私にこんな事を聞いてきた

「その神様が居た世界と、今の世界どっちの方がいいんだろうな？」

私は 居た時代が懐かしいが、R：2を始めて5分弱。評価のしようもない

「さて、私には解らんよ。神無き世界を踏みしめて5分と言った所なのでね」



「おwそつかそつか、それじゃ俺と一緒に狩りにでも行かないか？」  
「そうだな…神の居ない世界を知りたい。供を連れて行くのも良いかもしれんな」

供って（^^;）俺の方がLv高いんだぞ。と言っ戯言が聞こえたが不問にしよう  
なかなか気の良い男のようだ

「それじゃこれ俺のメンバーアドレスなw」

「ふむ。クーンか」

「うんうん。って名前見えてるでしょ」

「犬の鳴声のような名前だな」

「ちよ、それ酷くない（汗）」

「馴れよ。それと御名だがな景色に心奪われ見逃していた。すまんだな」

「いや、それならしょうがない熱心に見てたみたいだからな」

ありがとう。と返し私は踵を返すゲートに向かう私の後ろを始めての供が付き従う

「The world R:2」その始まりが今、幕を開けた

- - - - - A p k a l l u - アプカルルー - - -

スゴイ綺麗な人！！

ーダウン

はじめまして¥（\*・ ・\*）ノ

カッコイイPC見つけては書き、可愛いPCみつけては書き  
を繰り返してて、全くLvの上がない双剣士の

「ダウン」と申します

この前マク・アヌで呆とPC眺めてたらめっちゃくちゃ綺麗なPC見つけてしまったのデスヨ！！

もうなんて言うか騎士？真っ白の髪にドレス！！真っ黒の鎧着たPC様なんですが、もうわたしや惚れてしまいましたよ！！！！

マク・アヌの橋で夕日を見ながら涙するあの麗しの君！！まさに聖女！！！！ロングドレスのスリットから大胆に覗く生足にハアハア…なんて事はナイデスヨ？

隣にいた黄色いのがマジウザかつたんですが、彼女だけなら本当涙が出るくらい綺麗でしたよ（悦

結局黄色のに取られてどっかいつちやつたんですが…

誰か知り合いの人いたら紹介してー！！><

Re 2 : スゴイ綺麗な人！！

ーカト

うわ！！絵めちゃうまいですね

自分も絵上手になりたい物です><

ともあれ、この人らしき人なら私も見ましたよ

でも私の見た人は黒髪だったから違う人？かもですでも  
姿はまんまなんですけどね

ってかなんか「神が居ない」とか電波な事言ってる人だ  
ったんだけど…

でもその人もマク・アヌ橋で泣いてたんですよ？

同一人物としか思えないけど。どうなんだろう？

Re 3 : スゴイ綺麗な人！！

—ヘちよこ

>ダウンさん

めっちゃ絵うまいですねえ

ってかそれ結構大胆な衣装だなあ^^・鎧と言うかボディア  
ーマーって感じですねw

>カトさん

「神」だなんだと言って電波なら宗教に入ってる人皆な  
のであまり軽はずみな発現はやめましょうね^^

それにしてもこんな綺麗なPCは見た事ないですね  
やはり同一人物だと思いますが。髪が変わるなんて仕様  
はないはずですから見間違いだったのでは？

Re 4 : スゴイ綺麗な人！！

—ヌアザ

>カトさん

髪の色が主観によって変わるって言うのはバグかもしれないからなんとも言えないけど

「神が居ない」って言う発現なら僕は少しは理解出来るんだよね

少し興味があるから次にINした時にWissくれないかな？  
ダウンさんも神云々の話聞いたならWiss下さい

## 降臨（後書き）

拙い文章を読んで頂きありがとうございます^^

前書きにも書いたと思いますがPSS3ソフトしかしていないのでめちゃくちゃ資料不足です；

ネットとターミナルディスクから得られるできる限りの情報を詰め込んで煮詰めて書いています。できるなら詳細な年表でもあれば助かるのですが何方かそのような情報源お知りではないでしょうか？知っておられる方居ましたら是非ともご一報ください

## 出会い

ツガー！！

獣神像の前に置いてある宝箱を蹴り上げ中にあるアイテムを取り出すアイテムは予想していた物とは違い少し落胆してしまった、経験値も今の私でこのフィールドは不味いので正直何しに來たのかって感じだな

ふうとため息を一つ溢しタウンに戻るためプラットホームに足を向ける

踵を返し歩き始めた瞬間私は獣神像の位置まで跳躍する

「へえーこんなフィールドにいるにしては良い動きしてるじゃんw」

「ホントホントw大した物だよお嬢ちゃんww」

「つま、まぐれは一回だけでしょw」

「…」

目の前に現れたのは3人のPKだった

銃戦士・撃剣士・拳術士と言った所か、正直こいつらは馬鹿なのか？と問いたい気持ちで一杯だが今の所は相手の出方を伺うか

実力の差を理解し引くならば良し、それも解らず喚き散らすならば…

「ほらほらwこっちにいらっしやいな僕等の獲物ちゃん？w」

「そうだそうだw早くこっちこいよw」

「つま、こっち來たらすぐに死んじゃうんだけどね^^」

こいつ等…Lv差まったく解ってないようだ

しょうがない、今BBSで騒がれているからこれ以上PKKはした

くないのだが

この世はままならぬか

「はあ。よかろう相手をしてやる。だからさっさとフィールドに戻れ下郎」

P Kの3人は私の言った事がよほど受けたのか腹を抱えて笑い出した

「ぶつはwwwwちょw受けるんですけどwwww」

「つまw初心者故のハツタリでしょ？wwwつま僕等が出ようとした瞬間導きの羽でも使う気なんじゃないのwww」

「それそれwwwおみと〜し〜wwwぎやははははwww」

「阿呆か貴様等、使うなら今でも使えるであろうが。私がわざわざ貴様等の力を出し切れるようにとフィールドでしてやるうと言っておるのに、それすらも理解できぬか？」

そう言った途端に笑い声が止まった、今度は憤怒の表情だ  
喜怒哀楽が躊躇に出すぎているな。ガキか…

「それ笑えないねおねえさん」

リーダー格であろう銃戦士が私に獲物を向けながらそう言ってくる  
笑えないも何も大真面目で言ってるのだが

「貴様等の低脳さの方が笑えんと思うがね…っと！」

キレた奴が銃を撃ってくるも抜刀する事なく裏拳で弾く  
やれやれだ、1のダメージを食らってしまった  
これ相当Lv差と装備差激しそうだわ

私を攻撃することでバトルフィールドが展開されるも彼は既に戦意がない、通常攻撃とは言えたったの1しかダメージを与える事ができなかつたんだ否が応でも力量差を感じ取っただろう

「…やばいつてこいつLvかなり高いっばいぞ」

「そうだね、フィールドは20だが私自身のLvはその6倍と言った所かな」

それは彼等への死刑宣告にも等しかったんだろう  
逃走玉の使用も見られない事から所持していないのか  
手早く済ませて帰るか

「ではな、潔く散ってくれ」

抜刀術を一閃

その一刀で3人のPKは倒れ、バトルフィールドが消滅していく

「次からは相手を見て喧嘩を売るんだな下種共」

刀を背に還しながらそう言い再びプラットホームに向けて足を進めた



## 出会い

獣神殿の出口付近に又誰かが立っているようだ

陽光を背に立つ姿はシルエットしか映してはくれないが雰囲気だけで先程の三人とは比較にならない程の実力者というのが解る

やれやれ、今日は厄日なのかもしれないな

少々頭を痛ませながら、刀を取り出す

「警戒の必要はない」

そう言いながら両手を挙げる不審者

傍らにはゴスロリと称されるドレスを身に着けた少女もいる

どこか怯えた風な彼女に私が先走って刀を抜いてしまっただけなのだを知る

「すまないな。先程PK共に絡まれたのでね、少々攻撃的になってしまっていたようだ」

申し訳ない。ともう一度謝り、刀を還す

「いや、俺も君がPKに絡まれていたのは知っていた。妹が助けて

あげてとせがむのでな、様子を見にやってきたんだが…その必要はなかったようだな」

彼の目の先にいる少女は未だ怯えたように私を見つめてくる

この子を怖がらせてしまったようだ、彼等の目の前まで移動し少女と視線を合わせるようにしてしゃがみ込む

少女はビクツと震え彼の背に隠れてしまった

やれやれ、怖がらせたのは私なのだろうがこの怖がり方は少し傷つくな

「お嬢さん？怖がらせてしまってゴメンね。私の身を心配してくれたのはとても嬉しいよ。そこで私は貴女とお友達になりたい顔を見せてくれないかな？」

恐る恐るではあるが男の背から顔を覗かせて此方を伺っている  
出来る限りでは在るが優しい言葉と表情を作りもう一度声をかけてみる

「お願いだ。貴女の姿を見たいんだよ、ほら」

そう言つて手を差し出す

少女は手と男の顔を見比べ

男の「大丈夫だ」と言う言葉に勇気付けられたのか私の手を握ってくれた

少女の恥ずかしげな様子にすこし心が温かくなる

保護欲と言つのだらうか、この子になんだか守ってあげたくなるような憐さを感じ

すこしギュツと手に力を込めた

驚く彼女に笑いかけもう一度手を力をいれる

少女も笑顔で、ギュギュつと手を握り返してくれる  
それをどちらともなく小さな笑いが起きるまで繰り返した

二人で少しの間笑い合い  
自己紹介をし合う

「始めましてリトルプリンセス。私の名前は『モルガン』。貴女のお名前も聞いてもよろしいかな？」

「はい！私はアイナ『犬童愛奈』です^^」

え？え〜と本名だと思うのだけど…良いのだろうか？

そう思い男の方を見上げると、しょうがないな。とても言いたげな苦笑いを見つける。目が合えば「すまない」とWisで謝られるしでもこの子は全然悪くないからこの男が謝る必要など実は皆無なのだそれにこの真摯な態度は実に好ましい

名を名乗ってからのリアクションが無かったのが不安なのか涙目で私をみてる少女

不覚にも可愛いなど思ってしまったが、この子が泣くのは嫌だったのですぐさま言葉を返した

「ごめんね。私の名前は『モルガン』リアルでは『桜坂 蛭』とい  
います^^蛭と書いてケイだから呼び方はホタルでもケイでもど  
ちでもいいよ」

最後に、リアルの名前はネットではなるべく明かさないように。と  
言って頭を撫でてみた

コクコクと頷く姿が非常に可愛い

最後の件は知らなかったのか「そうなんですか？」なんて言葉を返  
され「そうなんだよ」としか答えなかったのだけど  
それくらい教えるよ保護者

そう言う意味を込めて男を睨み上げる

少し居心地悪げに視線をそらして行く役に立たない男

「アイナは初心者なのかな？」

もう一度アイナに視線を移し聞いてみる

「はい。今日が始めての『The World』プレイです」

はにかみながらのその言葉に、そうか。と言って頷き

「ならここは少々Lv的にもキツイと思うのだが大丈夫かい？」

そう言葉を返した

「ええ、敵は居なかったので、ここまでは景色を楽しみながらきました」

それに、兄は強いので大丈夫です！そう言う彼女は男に笑いかける  
そういえば敵は私が殲滅していたな…

ああ兄妹なのか、なら安心だな。この男は確かに強そうだ

男の方も信頼されているのが嬉しいのか、微笑みながらアイナの頭を撫でている

少々ムカツクがこの二人の間の信頼関係は相当の物なのだろう

「失礼を、私は『モルガン』貴公の名前をお聞きしても？」

立ち上がり男に向かって問いかける

少女と男は私に視線を向け、少し驚いたふうな表情になる

多分言葉使いが変化したのに驚かれたのだろう

これは癖だな、初対面の人には時代錯誤な話方に大変驚かれる。素はアイナと話ていた方なんだが此方の時代錯誤な話し方も実は好きだ。リアルでもたまにそんな話し方をして友人に変わっていると良く言われる

「ああ。俺の名は『オーヴァン』リアルでの名は『犬童雅人』と言う」

「…いいのか？」

彼は、構わない。と言って微笑む

なんとも私としては嬉しいのだがそんなにホイホイと本名を晒すのはダメだろう

少々気恥ずかしくなり視線を下げるとアイナの笑顔があつた。更に恥ずかしくなり目を泳がせてしまう

唐突に彼『オーヴァン』の笑い声が聞こえてきた

「なんだ？私の醜態をみるのがそんなに面白かったのか？」

ツクと笑いを我慢している彼をジト目で睨む

頬が赤くなっているので様にならないのが痛い…

「いや、音に聞く「真諦の女神」とは思えなくてな。笑ってしまった」

そんな可愛げのある姿もあるのだな。なんて笑いながら言われたつぐと声に詰まる…

この男は強敵だ、今までに出会った人達の中でも飛びぬけて強敵だ

「『真諦の女神』ってなんですか？」

睨む私と、尚も笑い続けるオーヴァンを眺めていた少女から突然そんな事を言われた  
自らの事と言えど、否、自身の事だからこそ、その問いはとんでもなく答えづらい

と言つか私に対して女神の渾名はかなり恥ずかしい

「彼女はP K Kとして有名なんだ。彼女に助けられた人は皆一樣に彼女を女神と称しその衣の美麗さと彼女が繰り出す目にも映らない光の如き抜刀術の技術から『真諦』と言われているんだ、もう一つは髪が見る者によって変わる事から美しさと不思議の極みと言われそこから『真諦』の件は来ている。その『真諦』と皆が口にする『女神』を合わせ『真諦の女神』と言われているんだ」

その言葉を聞いたアイナは眼がランランと輝きだす「ケイさんすごいです!!」なんて言われているし、名前はリアルの方を選んだようだああ、正直その渾名よりもう一つの方が有名なんだけど

「『巍然の禍神』の方が有名じゃないかな？」

今全部教えて置いた方が後で聞いて落胆されるよりいいと思い、もう一つの名を言ってみた

それにアイナは疑問符のみで答えてくる

ああちよつと意味が重複してるからわかり難いかな

説明してやって。とオーヴァンに言い説明に入らせる。Wisでいいのか?と聞かれたが、今言っておく方が気が楽だ。と答えた

「『巍然の禍神』と言うのは彼女が相手をしたP Kと彼女が参加したG V Gの人達が言い出した事だ。『巍然』とは他よりも数段秀で並ぶ者ないと言う意味だね。彼女はG V Gの折誰よりも多くの戦果を上げた事からその名を送られた。禍神と言うのは…」

そこで区切り私を見てくる

それに、いいから言えと答え続きを促す

「禍神と言うのは、G v Gで彼女が加勢したギルドの副団長が彼女と深く関わり、心変わりしてそのギルドを抜けた事を切欠にね。以降彼女と関わった者は良かれ悪かれ変化が起きる。と噂されるようになり。調和を乱す者『禍々しい神』すなわち、『禍神』と言われるようになった。それはやはり他とは違う者なのだと喩え、『巍然の禍神』と言われているんだ」

「巍然と偽善を掛けた物でもあるのだけどね」

最後にそう締めくくる

しやがみ込み苦笑いでもってアイナと視線を合わせ怖くなってしまったかな？と問いかける

アイナはブンブンと首を振り否定してくれる

「いいえ、貴女はそんなに怖い人に見えません。それに後の方の渾名は被害妄想のような気がします。なにより渾名似合いません」

と、そう言ってくれた

ありがとう。と最大の感謝を込めた一言を返しアイナを抱きしめるふえあ！！と可愛い声を聞き不覚にも笑ってしまった

「ありがとう。『巍然の禍神』の方はキライだから否定してくれて嬉しかった」

そう言つてギュウと力を込める

アイナも落ち着いてくれたようで私を抱き返してくれた

ああ、可愛いなあと抱き心地に酔いしれていると、上方から物凄い

威圧されそちらに目を向ける

なんか：オーヴァンがキレてる

サングラスを中指で上げる仕草は落ち着いているのだが、口元が邪悪に歪んでいる

面白いのでアイナの髪に顔を埋めてみる

くすぐったいです。なんて可愛い言葉を返してくれるが、しかしオーヴァンの反応の方が面白い、中指でサングラスを真つ二つにへし折り、そこから覗く目は半ば涙を溜めるように：半泣き状態だこのままおちよくるのも良いが恨まれるのは嫌なのでこの辺でいいかアイナをそのまま抱き上げオーヴァンの方へと差し出す

アイナは首を傾げ？マークを乱舞しているが、このまま抱きしめ続けると私のPCの命が危ういのだよ

オーヴァンは僅かに目を開き、すぐさまそれは微笑みに変わり、アイナを横抱きに受けとった

微笑み合う兄妹の姿は荒んだこの世界に少し落胆していた私に久方振りの癒しをくれた

今日は厄日か。などと思った出会いは私に今までにない安穩とした空間をくれた

今日は本当に良い日だ

アイテムや経験値は良い物ではなかったがそれに勝る収穫を私にくれた

オーヴァンのニヤケ下がった顔を見るのも飽きてきたのでちょっと気になった事を聞いてみる

「二人はなんでこのフィールドにいるんだ？オーヴァンからしてみれば低いだろうがアイナにとっては危険なLv だと思うのだが？」  
「アイナが適当に選んだフィールドが此処だったただけだな」



帰ってきた答えはそんな感じだった  
偶然彼等はここに訪れ、私は偶然Lvに見合わないフィールドに居  
たとそう言う事か

得難い出会いは真実偶然に出会っただけか

「ふむ。ではアイナに感謝しなくてはな」

「??」

アイナは首を捻りながら何でだろうと思案しているようだ  
その姿も可愛いと言う言葉が相応しい  
ともあれアイナがショートする前に答えを言ってみる

「アイナが偶然此処を選んでくれたおかげで私達は出会えた、私に  
とっては得難い出会いとなったからだよ」

そう言うときアイナは花のような笑顔になり  
私は此処を選んで、ケイさんに出会えてよかったです！！なんて嬉  
しい答えを頂いた  
オーヴァンもまた微笑み、俺にとっても良い出会いが出来た。アイ  
ナに感謝しなくてはいけないな。と言ってくれた  
その言葉に気分が昂揚するのを感じる、こう言う出会いこそがオン  
ラインゲームの醍醐味ともいえる  
本当にいい人に巡りあえたようだ

「ケイはもうタウンに帰るのか？」

しばし3人で談笑し、メンバーアドレスとメールアドレスを交換し  
た所でオーヴァンから聞かれる

「そうだな、ここに来たのは獣神殿のアイテム目当てだったからな。もう用はないのだが」

それに、ふむ、と頷き彼はこんな提案をしてきた

「俺達はもう一つ行く場所があるのだが、この後余裕があるならケイも一緒に来ないか？」

「そうです。折角出会えたんだからもう少し一緒に居たいです」

それは大変心動く提案だ

私もここでバイバイなんてのは少ばかり嫌だった所だ

人に会う予定があるがすぐに済むのでその後でもいいか？と返し

二人ともそれでも大丈夫だと言ってくれたので、ショートメールを送った後三人で雑談をしながらプラットホームまで移動した

悠久の古都マク・アヌ

ショートメールを出した相手はまだ来ていなかった

「………すまない。駄犬が少しばかり遅れているようだ」

私の後ろで佇む二人にあやまりをいれ

もう一度ショートメールを出す、今回は少々きつめな語句を使って二人は大丈夫と返してくれるが、それでも私の所為で移動に時間を

食っているのだから申し訳ないと言つ気持ち強い

…

…

…

…

…

待つ事2分弱やっとお目当ての駄犬が来た

周りに女性PCを侍らせて現れる黄色いのに私の堪忍袋の緒は程よくブチ切れた

「君の瞳の輝きは誰も適わないさ、夜空に輝く星々も君の前では全てがくすんで見える程だよ」

「やあ〜ん。クーン様ったらそんな事いわないで〜私恥ずかしい〜  
／／／」

「恥ずかしいなんて事ないさ、自信を持っていいんだよ。それは誇れる事なんだからね」

「もう！！クーン様私にも構って下さいよ〜」

「ゴメンね。君の姿は全ての人を魅了するからね。俺だけが一人占めしちゃ悪いと思ってただけど寂しい思いをさせちゃったかな？」

「あん。そんな私にはクーン様しか居ません。貴方の目を独占したいんですよ」

「君はなんて罪作りなんだ、その美貌で迫られると俺の心を捕えれると知ってそんな事を言うんだね」

「あ〜ん。クーン様〜」

私に気付かず尚も続く頭の悪い会話

それが人を待たせた原因か……駄犬の分際で主人を待たせただけでも極刑なのに、これほどの醜態を晒すとは。しかもアイナとオーヴァンの目の前でだ

身内の恥がこれほど憎いと感じたのは初めてだ

すまん。少し離れる。と二人に言って私は尚も醜態を晒し続ける黄色いの元へ歩いて行った

「君達は俺の心を掴んで離さないつもりなのかい？でもゴメンねこれから人に会う予定があるんだ、心は君達と一緒にだから離れる事はないよ」

「……」

「え？あれ？どうかしたの？」

クーンの背後に立つ私に彼女等だけが反応した

此方を見つめて揺れぬ瞳は少々居心地が悪いが、クーンのこの様な場面に私が赴けば彼女等は一様に同じようなりアクションを取るのもう馴れた物だ

「やあ駄犬。今日も女漁りに精が出るようだな」

重いわけでもないのにカクカクと刻みながら此方に振り向く駄犬又の名をクーン

「あ、あれえ。モルガンもう来てたの？アハハこれにはちょっと訳があります」

「そうか。私を待たせるほどの理由だ。さぞご立派な理由なのだろうな？」

絶対零度の目は駄犬を射抜き。恐らく聞くも哀れな理由を問いただす

「アゝ、えゝとだなあその…」

言葉を濁すその姿は滑稽、いつもならここで許してやるが今日は別だ友人の目の前であんな姿を晒してくれたんだ、それ相応の恥をかいて貰わなければ気がすまん

「私達この男に騙されそうだったんです!!」

もう少しこの男を追いつめてやろうと思った所で両脇に控えていた女性PC二人がそんな戯けた事をいいだした

「…は？」

これは私の呟きだ

クーンはもう見るも無残な敗者の表情でPC二人を見ている

しかし意味がわからない、先程までコイツに心酔していただろう

「助けてくださってありがとう^^あのお姉さまってお呼びしてもいいですか？」

「私もそう呼びたいです><お願いします!!」

今まで感じた事のない圧力に

あ、ああ、呼び名は勝手にしてくれて構わないが…と呟いた

瞬間、彼女等は二人揃って「ああ、お姉さま!!」「」と叫び以降反応がなくなった

「……駄犬よ、どうなっている」

こいつを攻めるよりもむしろこの状況の説明を聞いたかったので怒りは伏せ聞いてみる

と言うより怒りは呆気にとられた瞬間どこかに消えた

「ううふううう」

駄犬は鳴いていた、否、泣いていた

あの女性達の反応はクーンをよほど追い詰めたとみえる

鬱陶しかったので蹴りをいれ説明を促す

「モルガンと鉢合わせるといつもこれだ（泣　でも俺ってああ言うロール無理だしな（激泣）」

「そんな事はどうでもいいからと説明しろ、いや、それはもういい探索を頼まれていたフィールドの条件は達成したからなアイテムを渡すからさっさとしろ」

そんな事って…、と呟く駄犬

事情が解らないからなそんな事扱いだ

さっさとアイテムを渡してアイナと合流する方が大事

「次にあのような状態で私と会ったならその時が私とお前の最後だと思え駄犬」

アイテムを渡した後そう言い残してアイナ達の下へと移動した

と言ってもこのセリフ実は20回以上言っている

それだけああ言う状態で会う頻度が高いのだが、あれが奴の楽しみ方のようなので半ば諦めている

背後から「うわ、マジかよ。リアルで失神？初めて見た。モルガン様影響力在り過ぎでしょ（苦笑）」と言う駄犬の言葉が聞こえるがどうでもいい

「すまん。待たせたな」

本当にすまない。と繰り返し謝る

オーヴァンは苦笑いしながら大丈夫だと答えてくれたがアイナは：

何故かご立腹

可愛い頬を膨らませてそっぽを向いている

：ショックだ。駄犬の所為でアイナ嬢から信頼を失ってしまった。

本気でショックだ

ガクーンと肩を落とし消沈気味の私とプンプンと怒っているアイナを氣遣ってくれたのかオーヴァンは「エリアを移動してから落ち着いて話そう」と言って移動した

エリアワード「隠されし 禁断の 聖域」

グリーマ・レーヴ大聖堂

ああここか

ここは私が始めてINした時にクーンと一緒に立ち寄った場所だ  
The worldが本当に女神の恩恵から離れたのか確認したくて寄ったのだけど再確認しただけだった、それでもこの聖的な雰囲気は私の好む物だったので疲れを癒すためにもここは良く寄っていた

少し感傷的になってしまうも

「うわぁ、綺麗な所ですね」

なんて先程の理由の解らない怒りを忘れたかのように驚くアイナにちょっと癒される

もしかして機嫌直ったかな？と思いアイナを見ていると視線に気付

いたのか、プイッとそっぽを向かれた

本気でシヨックだ…何がアイナのご機嫌に沿わないのか解らないから余計にシヨックだ…死んでしまいたい

死んだように放心しているとオーヴァンに手を引かれ大聖堂内に引込まれる

3人で椅子に腰掛け（私・アイナ・オーヴァンの順で）、どうしようかと思案していると

「さて、ケイは死んでるから復活するまで放置するとして、アイナ？何をそんなに怒っているんだい？」

ゆったりとした独特の声色でそんな話を話し出すオーヴァン

私の状態を完璧に読み取っているので死んでいる発言と放置発言は不問にしよう…

ゆらゆらゆらりと視界を彷徨わせているとアイナの心配気な目と視線が重なる

オーヴァンの死んでいる発言の真意を読めなくて心配してくれているようだ。

…なんて可愛い反応なんだ。ハラハラと此方を見てくるその仕草に私はマジで惚れそうだ

蘇生されそうだった気持ちは、しかし。オーヴァンの「アイナ」との呼びかけで終ってしまった。こいつ狙って声を掛けやがったな…

「あのね、ケイさんが『お姉さま』って。私の方が仲良いのに、あの人達より…」

支離滅裂だけどその言葉は、もしかして嫉妬してくれてるの？

ああなんだこれは、本当に嬉しいかも。必死に話しているアイナは微笑ましくラブリーだ抱きつきそうになる体はオーヴァンに押し留められたが、嫌われたのでは無いと解ると本当に嬉しかった



尚も説明をしているアイナに私は話しかける

「話を聞いてると嫌われたのじゃないんだよね？」

ビクツと震え此方に振り向く

「あ、ち、違います！！キライになんてなってません！！私は好きです！！出合つて1時間くらいだけど綺麗で強くて大好きです！！」

良かった。と呟きフラフラとアイナに抱きつく姿勢をとるが、それはオーヴァンに視線で阻止された

「なるほどな。アイナは彼女、ケイが見ず知らずのPCに『お姉さま』呼ばわりされたのが嫌だったんだね」

これまた静かと言うか儼かな声での問いに

そつです！！と首が& amp; #25445；げるのでは？と思う程振るアイナ

マジで可愛いアイナにそれじゃあと切り出しこんな提案をした

「あの子達は私もしらないPCだから姉妹とはいかない。でもアイナの事はまだ少したが知っているし私も君の事が好きだ。彼女等が呼ぶ『お姉さま』とは違いこの世界の中だけでも私とアイナで姉妹とならないかな？」

これは私自身としては清水の舞台から飛び降りるってぐらいの気持ちでの言葉だったのだが

アイナは目をこれでもかと見開いて凝視してくる

その反応に出すぎた事だったかな？と言う思いが飛来し。少々気落ちしてしまう

わ、忘れてくれ…。と言い肩を落とす

物凄い後悔の思いが飛来しているが、それは次の彼女の言葉で四散した

「そんな…あの嬉しいですけど…私なんかでもいいんですか？」

不安気に此方を見つめてくる双眸には涙が溜まっている

しかし「私なんか」とはどう言う事だ。そこはかなり気になったが彼女は気分害したわけでもないと解ると気が軽くなった

「私はアイナだからこそ、そう言うんだよ？他の人にはそんな事言わないアイナが可愛くて大好きで愛おしいから私は姉妹にならないか？と言ったんだ」

ダメかな？と言い会話の途中から顔を伏せているアイナを覗き込んでみる

そこには涙で濡れた笑顔があった

私に顔を見られたのが恥ずかしいのか自身の服で涙を拭き笑顔を返してくれた

「ダメじゃないです。私とても嬉しい。これからは兄さんと姉さんが出来るんですね。本当に嬉しいです」

そう言って抱き付いてくる

それに抱き返し、ちょうど胸あたりに在る髪を撫で付ける

話の切欠以降口を挟まなかったオーヴァンは私達をとて嬉しそうに眺めていた

彼に無断でこのような関係を作ってしまった事を怒っているかとも思ったのだがそれでも無いらしく奇しくも私の兄か弟になった彼は微笑み続けていた

少しの間その体制でいたのだが

オーヴァンが立ち上がり祭壇の前まで移動していった  
それに釣られ私とアイナも彼の後を追いつつオーヴァン後ろで立ち止まった

「二人とも知っているか？ここには嘗て女神の像があった」

唐突に、彼はそんな事をいいだした

「ううん。知らない。ね、姉さんはどうです？」

頬染めながら姉とそう言ってくれる彼女にまた抱きつきたくなるが  
それを自分でも奇跡と思えるような理性でもって堰き止めた

「私？私は知っているさ。ここにはね、『Aura』って言う女神  
様がいたんだよ」

すごい。何でも知ってるんですね。なんてキラキラと輝く瞳で言われてしまった

なんでもと言う訳でもないがこの話は結構しってる人いるからなあ

「博識だな。そう、ここには嘗て『Aura』と言う女神がいた。

彼女の去った今では清浄なる物しか残っていないが、今は無き女神  
に誓おうか？」

なにを？と言う問いは私にもアイナにもなかった

そうだな、いい考えだ。と私は笑い

うん。私もそうしたい。とアイナも笑った

最後に、オーヴァンは此方に振り向き、では誓い合おうか。と笑った

~~~~~

これから俺達は兄妹になる

この世界で生きる限り何者にも断つ事

の出来ない絆を

この世界に居る限り終る事の無い絆を

世界すらも終らせる事のない縁を、此処に誓おう

~~~~~

これは、物語の始まり

少女にとっては幸せと希望それに恐怖の

彼にとっては絶望と導きと誤算の

私にとっては幸福と失望となにより終焉の  
そんな物語の始まりの一節

- - - - - A p k a l l u - アプカルルー - - -  
- - - - -

お姉さまLove!!

—ヒヤシンス

始めまして現在進行中で恋してます銃戦士なヒヤシンス  
です

先日私は運命の出会いをしました  
友人と二人でナンパされてた最中に突然現れ私と友人を  
黄色魔の手から救ってくれた方なんです  
女性PCにも関わらずその凛々しさ・神々しさに心から  
体まで奪われてしまいました

波打つ黒髪は美しく衣と甲冑は聖と邪の二重奏、思い出  
すだけで感極まる程に惚れてしまいました、ああもう—

度会いたいわ…

Re：2 お姉さまLove！！

ーバシヨウ

絵自体は大変お上手なのですがちよっとて言うかかなり美化されてますが。これはまさしくモルガンさんですね。彼女はYOMOMYAMABBSではかなり有名な方ですよちよっと調べるだけでも大量の情報が入ります  
まあ彼女自身は書き込みとかしてないので真実かどうかは不明ですが  
二つ名が付くくらいの実力者ですからね。それにPCの美麗さも他とは一線を臥した感じしますから。本当有名な方です

Re：3 お姉さまLove！！

ーミノヤ

>ヒヤシンスさん  
すっごい絵うまいですねw  
なんだかモルガンさんの神々しさがビシビシ伝わってくる絵です^^

しかしヒヤシンスさんの心酔度超高いですね  
是非ともモルガン様ファンクラブへのご入会をオススメします^^；私は関係者ではないので入会方法は別BBSに書いてあるのでそちらを見てください

>バシヨウさん

確かに彼女有名ですよ

二つ名も2個あるしね。彼女はPCもさる事ながら錬装士にしてあの強さつてのも有名になった一つの理由ですね

錬装士で彼女以上の強さの人って聞きませんし、錬装士いても力ナリ弱い人が多いですからね

てか彼女以外の錬装士って私含めて皆弱い...orz

## 出会い（後書き）

駄文でございますが読んで頂きありがとうございます



## 覚醒・微

今日も退屈な日常が終りを告げる

チャイムの音と、クラスメイトの喧騒がそれを告げてくれた

別に寝ていた訳ではないが、呆と空を眺めていて時間の感覚が少しばかり狂っていた

リアルでもネットでも考えるのは少し前に知り合った兄妹の事だ。

彼等は私の馬鹿な提案を受け入れてくれネット上だけではあるが兄妹と言ってくれる

一人っ子になってしまった私にはその提案を受け入れてくれた事が物凄く嬉しく又苦しくもあった

あの二人と出会ってもうすぐ1ヶ月になる、その間駄犬に頼まれるアイテム収集もほとんど断っている

理由は言わずもがなアイナとオーヴァン。二人と一緒に居る為だ

二人はフィールドやダンジョンで狩りをするのではなく「ロストグラウンド」と呼ばれる地域に赴き、日常の事、『The World』にある秘密の事、オーヴァンが見つけてきた書物を読み聞かせる事。そんなほのぼのとした時間をすごす事に終始していた

たまにフィールドで行う事もあるが

場所がどこであれ二人の作り出すその空間は私に安らぎと癒しをくれた

「姉さん」と花も恥らう程の笑顔で私を迎えてくれる「妹」

「ケイ」と緩やかにだけどこか深みのある声色で私に微笑みかけしてくれる「兄」

私はあの時間がずっと続けばいいのに。なんて言う陳腐な言葉を想起してしまう程にあの二人に依存してしまっている

「先輩、どうしたんです帰らないんですか？」

二人の事を思っていると不意に後輩に声を掛けられる

彼女の名前は「滔々屋 恵美」後輩で部活を引退した私の跡を継ぎ現剣道部の主将を勤めている少女だ

彼女とは妙な縁があるのだが、それは後ほど語ろう

「ん？今から帰る所だ。恵美は部活じゃないのか？」

空から彼女に視点を変える

「今日は休部なんですよ。なんでも部員の一人が犯罪に手をだしちゃったらしくて」

参りました。なんて朗らかに言ってくれるがそれは一大事じゃないのだろうか？

最悪廃部なんて事にもなるだろう、最低でも今期の試合は全てキャンセルされる

「そんな事部外者の私に言ってもよかったのか？」

「大丈夫ですよ。私、先輩の事信頼してますし。それに……」

「それに？」

あ、いえ、なんでもありません。頬を染めながらそんな答えを頂いた昔からこのような態度をとる者が多かったが最近はより増えている気がするな

理解出来ないがなにかしら理由があるのだろうか  
そうか。

「なら一緒に帰ろうか」

彼女の反応はやはり他の子達のように耳まで真っ赤にし首を振りま  
くる

やはり、理解出来ない

途中他愛のない会話を楽しみながら自宅への道を歩く

後輩とは私の家の前で別れた

実の所、彼女の家は500m程手前にあったのだけど私を見送った  
いとこの彼女の請願により、何故か私の家の前まで一緒に来てしまっ

た。ではな。気を付けて帰るんだぞ。と別れの挨拶をし

彼女の、はい。また一緒に帰りましょうね。との言葉で次の同伴帰  
宅の約束をされてしまった

別段嫌な気はしないが、そう言うのは気のある男とした方が雰囲気  
が出る。と忠告をし我が家への扉を開けた

リビングまで行くと数年前から続く冷めた夕餉と紙切れが一枚あつた  
紙切れにはいつもの如く『冷めない内に食べてください。冷めてい  
たら暖めてから食べなさい 母』と実に心の籠っていない機械的な  
文字が綴られていた

それをレンジで暖め夕餉を取る

食器は自分で洗い乾燥機へ放り込む

お風呂に湯を張り

お風呂に入る

着替えを済まる

自宅への扉を開けてからここまでは、数年同じ動作しかしていない  
んじゃないかと思う程この動作は私に馴染んでいた

進学路も決まり、もう学校には単位をとりに通うだけになってから  
母との交流は目に見えて減った。いや、受験している時もあれば果  
たして交流と言える物だったのか、正直私には自信がない

この大学へ行きたいと言えば「そう」と答えを返し、学校での友達と話した面白い話をしては「そうなの」と答えを返される。それは本当に母子の会話だろうか？私が必死に話しても一言しか返答のないそれは真実会話と言われる物だったのか：

止めよう、これから二人に会いに行くのだ。あの二人は他人の感情の変化を容易く看破する、隠すつもりは無いのだがそれでも悲しませたり、怒らせたりするのは私の本望ではない

自室へと戻りメールとBBSの確認を行い「The World」へログインする

覚醒・微

僅かな時間を置いて構成される仮想の私

お馴染マク・アヌの力オスゲート前に現れる

今日もアイナとオーヴァンに会う為に来たのだけど、実はメールでクーンに呼び出されていたりもする

『最近のモルガンはおかしいぞ。あれだけ熱心にプレイしてたのに此処の所全然Lv上がってないみたいだし。俺の依頼も断る事が多くなってるだろ？』

モルガンが俺の事を友達だと思ってくれているなら話したい事がある、INしたらショートメールをくれ。すぐに駆けつけるからさ』

とまあこんな感じのメールが来ていたのだ

仮令駄犬だとしても彼は私の始めての供だ友人と言ってもいい心配してくれるのはありがたいが、今の私の状況をどう説明すればいいのか正直言葉に出来ない。故に見てもらおう方がいいと思い先程メールを出した

以前とは違い本当にすぐに来たな

広場で待ち合わせる、と送ったはずなのに力オスゲートと広場を繋ぐ石橋の上で遭遇した

「よかった。なんとか友達だと思われてたみたいだな」

いつになく真剣な面持ちで私を見据えてくる

彼も自分の扱いに不安を覚えていたのだろうか？

「ああ。私はお前を供と捉えているが、それでも友人を供にしてはいけない。なんて事はなかるう？」

「あらら（^^;）結局そこは覆らないのね」

「もちろんだとも。この世界で供はお前一人だ」

うわあ、それってなんて殺し文句なんでしょう（苦笑。と後頭部に手を持っていき恥ずかしげに掻くその仕草は始めてみる物だが何故か彼にはその仕草が良く似合っていた

「それでメール読んでくれたって事だよな？」

「故に呼び出したのだ」

「うん。内容は解つてると思うけど、君の事だ。以前ならファイルに出て狩りをする事の方が多かったのに最近はINしても何をしてるのか解らない。IN表示にはなっているのにショートメールを送れないなんて事もあった。なあ、一体なにをしてるんだ？俺は君に救われた、だから俺は君の力になりたいんだ。悩みがあるのなら話してくれないか？」

再び真剣な面持ちで口を開けばそんな事をいつてくれた

彼の心使いはともありがたい。彼を救った覚えは残念ながら無いが私の力になりたいとそう言ってくれるのはとても、嬉しい

「悩み、なんて事はない。そうだなここ数週間幸福を噛締めていた」「幸福？」

「ああ。その間お前に構ってやれなかったのは本当にすまないと思つている。お前の心使いにも本当に感謝しているんだ」

「…幸福ねえ。ま、モルガンがそう言うのなら余り検索しないけどさ。心配してる奴がいるって事、忘れないでくれよ？」

「お前のお陰で再確認した所だ」

そりゃよかった。話した価値あったな。嬉しそうに笑うクーン  
彼は本当に快い友だ、人のために自身の心を砕いて接するその在り方  
それは私には無い美点で、少し羨ましいとさえ思う  
まあそれだけだから。と言って去ろうとする彼を呼び止める

「私の幸せの形を、貴方に見せる」

そう彼になら少しだけ私の存在理由を明かそう

歩く事数分、マク・アヌの港と広場を繋ぐ橋まで来た  
そこには兄はいないけれど、私の妹がいる  
後ろに続くクーンは訝しげにしながらも大人しく私の後を付いて来て  
てくれている

「見る。クーン、彼女が私の幸せの形。その片割れだ」

当初は不安気に私とオーヴァンを待っていたのだが今はそんな事はない  
いつ来るのだろう、もう少しかな。そんな事にウキウキしながら待つ  
っている妹がいる  
表情を見ればつまらなさそうに。所作をみれば楽しげに。待つと言  
う時間を楽しんでいるアイナがいる

クーンはと言えば意外な物でも見るかのようにアイナと私を交互に見ている

正直お前の私に対する認識はどんなだ？と問いたいが今はアイナに  
声を掛ける方が大事

「姉さん!!」

やはり極上の笑顔で迎えてくれる妹に私の至宝はこの子だと再確認する

「ね、ねねね姉さん!？」

抱きついてきたアイナを受け止め、待たせてゴメンね。と謝る  
いつもなら、私も来た所。と笑いかけてくれるのだが今日はクーンに意識を捕られているようで無反応…クーン連れて来るんじゃないかな

「この男はクーン。私の友人で供もしている」

なにやら叫んだ後で固まってしまったクーンは置いというて困惑気味の妹にこいつを簡単に紹介する

「供? 供って何？」

「そうだな言ってみれば従者のような者だよ。私の護衛や身の回りの世話などをする者の事だね」

それを聞いたアイナの反応は私の予想の斜め上を行っていた  
私の予想では「ふん、そうなんだ」て感じのそっけない物を期待してたのだが

アイナの反応は極上だった。凄い凄いと目をキラキラさせてクーンを眺めている

「クーンさんは女神の騎士様なんですネ!! 凄いです!!」



その言葉に私は啞然とし、クーンは再起動したのはいい物の爆笑の渦に飲まれている

無遠慮に「め、女神ぶっははっは、俺が騎士ってうはははは」と笑う男はどうなのだろう、アイナも吃驚して固まってる程だ

私を笑うのは別に構わないのだがアイナの発言を笑うのはムカツク一発頭を叩いて正気に戻らせるか

ガズンツ!!!

と、頭を叩いた音とは思えぬ程の音が響いた

まあ私の姿は2ndフォームになっているので鎧が甲冑にLVUPした所為か手甲が付いているのでその効果音なんだけど

思いの他クーンには衝撃が行ったらしく笑いを収めクラクラと覚束ない感じだ

「ちょアングルが凄いいきなり変更されたからちよっとフラフラなんですけど（汗）」

と情けない事を言い募る駄犬

「お前がアイナを笑うのが悪い、少しは見直してやったのにすぐに評価を元に戻す事になるとは思わなかったぞ」

「違うつて。アイナちゃんを笑ったんじゃない、モルガンが女神つてのと俺が騎士つて言われたのに受けたの（苦笑）」

「む、ならば不問に処す」

ははあ。と恭しく礼をとる

それをオロオロと見るアイナ、その姿は大変…ンン…可愛いがどうしたのだろう

「どうしたんだ？」

「うん。姉さんは女神様じゃないの？」

「（爆笑中）」

この子は私の事が女神に見えるのだろうか？

いや、見えるからこそその問いなのだろうが…なんか複雑だ…

クーンはこちらに音声が届かないようリアルだけで笑っているのだろう。（爆笑中）ってのはなんだそれはいらないだろう…

「んゝ私は女神ではないよ。他の人達の中には私を指してそう呼ぶ人もいるけどね。この世界の女神はすでにこの地にはいないんだ」

「じゃあ姉さんが次の女神様になったんだよ。BBSって言うの見ただけでそう言ってる人も沢山いたよ？」

「確かにねWBBSじゃモルガンの噂が更新されない日はないくらいだからなwある意味『The World』の女神かも（笑）」

いつの間に復活したのかクーンがそんな事を言うてくる

あろう事がアイナに余計な事まで吹き込んでくれるし。こいつマジで何で連れてきてしまったんだろうな…

目の前では私に抱き上げられたアイナとクーンがにこやかに話してるし

「そうです姉さんはやっぱり女神様ですよね」

「うんうん（^^）モルガンは女神様だね」

「「ね」」

ユニゾンしてやがる、駄犬の分際で私の宝物に手をだすなんて…

思わず手が出るほどに憎らしい、出会って数分でこんなに笑い会えるなんて私でも無理だったのに

「あいたー！。何すんだモルガン！！」

「すまん、反射的にぶん殴ってしまった。しかし痛いとはこれ如何にグラフィックなのだから痛覚はなかるう？」

「ノリだノリ。てか何気に怒ってらっしゃいます？（汗）」

「え？姉さん怒ってるの？」

「いや、怒ってなどいないよアイナ。私の従者は躑が行き届いていないらしくてね。今躑けていた所なんだ」

「そっかあ。姉さんの騎士なら恥かしい行動とれないものね。がんばってね姉さん」

ああ、任せる。と出来うる最大の笑みを返す

躑って…（汗。などと呟いているが私のアイナに手を出そうとしたのだ。本来なら私刑だが今回はアイナの手前ぶん殴る程度ですませたのだ、感謝こそすれ恨まれる云われはない

そんな感じでアイナに笑みを、クーンに絶対零度の瞳を向けながら雑談する事数分

何度聞いても心地よい深みのある声が聞こえた

アイナ、ケイ。待たせたなと

「兄さん！！」

私の時と同じくらいの笑みを作り、私達の兄に手を振るアイナ

未だ抱き上げている状態だったので地に下ろしてやると転ぶ<sup>まろ</sup>ように駆けて行く、そこからは私の時と同じようにオーヴァンに抱き上げられる

それを微笑ましく見ながら最後のピースが揃った事をクーンに告げた

「これが私の幸福だ」

と

親指と人差し指で枠を作り、その中にアイナとオーヴァンを入れるそれをクーンは否定した、違うだろう。と

激昂しかけるもクーンに背を押され、オーヴァンに抱きつくようにして転倒を避ける

振り向けば先程の私のように枠を作りその中に、私・アイナ・オーヴァンをいれ。

『これがお前の幸福だろ？』

とそう言ってくれた

不覚にも顔に朱がさす

オーヴァンとアイナはそれを見てクスクスと笑い

クーンは意外だったのか手をダランと下げ放心するかのように口を開けていた

それも数秒後には先程とは比にならない程の大爆笑に変わるのだが皆得難い私の友人で在り、私の家族でもある。たまにはクーンを混ぜて談笑するのもいい物なのかもしれない

その後は、いつまで経っても笑い止まないクーンに蹴りを入れオーヴァンにクーンの紹介をした

そこでのアイナの一言がまたクーンを笑いの渦へと落とし

ロストグラウンドへの移動を開始するのはオーヴァンが現れてから1時間も経過してからになった

別れの際「理由がわかって安心した、まあ適度に俺の事も構ってくれよw寂しくてしんじやうからなw」とクーンは言ってくれた。これからは暇を見つけてアイツに構ってやるのも一興かもしれない

「すまなかった。あれほどまでに話し込むとは思わなかった」

ゲートへ向かう最中、約1時間も予定を遅らせた事に対する謝辞をいれた

「構わない。あれはあれで有意義な時間だったように思うからな」  
「そうです、姉さんが気に病む事なんてないよ」

そう言ってくれるのは嬉しいが二人がここで出会う意味を聞いた私としては物凄く気にしてしまう

この二人は『The World』でしか会えないのだ  
理由距離的な物と後は身体的な理由から

アイナは現代の医学では治療困難な難病を患っており、現在はドイツの病院で入院生活を行っているのだとか。その話を聞いた時は心臓が止まりそうになったが手術を受ければ助かるのだと言われ一応安堵したものだ

オーヴァンに関してはリアルな事を余り話してくれないので深くは知らない、情報系の職に就いている事、元ハッカーで会った事しか解らない。アイナにすら詳しく話していないようだから、守秘義務みたいなものもあるのかもしれない

思考している間にゲートに着いたのだがワードを入れるでもなく

「今日は二人を招待したい場所があるんだが、そっちに行ってもい

いか？」

こんな言葉を発した

「いいか？」も何もない、アイナも私もエリア設定はほとんどオーヴァン任せなのだから

私は頷きかえし

アイナは「どこでもいいよ」と笑い返していた

それに微笑みで返し

オーヴァンはエリアワード」の

と入力した。不正のエリアワード。隠された部分には確かに文字があるのだから読めないのなら意味がないな

お馴染のエリア移動をすました後目に広がるのは真っ白な部屋だ

4面が白に覆われ、その部屋の中心と思われる場所にのみ椅子が設置してあった

私とアイナは啞然とし、その反応を見ていたオーヴァンはクスリと笑った

「創造主の部屋。ここはそう呼ばれる場所だ」

椅子の前まで移動した彼はそんな事を言う

創造主。ハロルド「ヒューイックの部屋、とそう言う事だろうか？

「アイナ、ケイ。ここの存在は誰も知らず、誰も訪れる事が出来ない、此処ならば私達は誰にも侵される事なくすごす事ができる」

それは私が懸念していた事、ロストグラウンドと言えどワードさえ知ってしまえば誰でも行く事が可能なのだ。実際なにかPKと鉢合わせして戦闘に入った事さえあった

まあそれ以上にこの場所を私にも教えてくれたのが嬉しかった、私

は彼に受け入れてもらっていると再確認できたから

「それはいい。普通のエリアならばPK共が来て鬱陶しかったからね」

「ああ。安心できる団欒の場が欲しくてな。すこし調べてみた」

それに、アイナも、うんうん。と頷き二人でオーヴァンの元へと駆け寄った

ああ、そうだ。そう切り出したオーヴァンは一つの書物を持っていた

「これはこの部屋を探している途中で発見したんだが『黄昏の碑文』と言う。この世界の基盤になったと言われている物だ」

「よくそんなデータが残っていた物だな。R：1と一緒に削除されたと思っていたが・・・」

「凄い物なの？」

「物凄くくね。これはハロルド・ヒューイック言われる人物が作った物だね。本来はエマ・ウィーラントと言う人物の書いた物語なんだが、まあその辺はいいか。このデータ一つを見つける為にCC社が血眼になっている。と言うくらいには凄い物かな？」

その説明を聞いた二人の顔は凄かった

アイナは泣きそうな

オーヴァンとは言えば今までに無い程目を見開いて凝視してくる

「あゝ、アイナ？大丈夫だよ？ここにはCC社すら手がでないような場所だし。それにCC社にこれが渡ったとしても百害あって一理なし。永遠にブラックボックスに眠ってた方がいいような物だからね。私達はこれを悪用するような事はしないだろう？」

そう言ってアイナを撫でる

話を聞き終わったこの子は私に微笑みを返してくれた  
うんうん。やっぱ笑ってる方がいいよ

アイナは落ち着いたから良いとして  
この兄は一体何に驚いているのか

「オーヴァンよ。一体何がそれほど驚かせているんだ？」

「…ああ。ケイは何故そんな情報を？ハロルドの事だけなら驚きは  
したが閲覧できる情報元はある。しかしCC社が探索しているなど  
一体どこで…」

「ん？第二のライトを作ろうと暗躍してる奴等もいるだろう？」

その発言は彼を更なる驚愕へと追いやった

先程とは比べるもないほど驚愕が伝わってくる

珍しい…こう言っちゃなんだが彼が驚くと言うリアクションをとる  
なんて今まで見た事もなかったから  
アイナと二人首を傾げあう

「それは“どうやって”知ったんだ？」

「は？そんな物

あれ？」

私が言った事の情報元…どこ…だ？

知っているのが当たり前のように私はそれを知っていた…

そうだ。何処だ？なんで私は知っている？カイト？見た事もない。

聞いた事もない。なのに何故私は知っている？彼の歩んできたであ  
ろう映像を何故…知っている？

途端知らない情報が勝手に流れ込んでくる。カイト。黄昏の碑文。  
黄昏の腕輪。蒼炎。蒼天。蒼海。モルガナ。八相の獣。クビア。今  
日なエリアでPKされた。あははははははクスじゃん。お？お主初



心者でござるか？拙等が手ほどきしても良いでござるか？今回のハ  
ツキングはなかなか骨が折れた。私も風に還る。直毘様もう休まれ  
てわ。ちょゝ楽勝wwww。豚が、死ねよwヒヤハハハッハッハ  
ハハハハハッハハハハハハハハハ

「ツガ！！！！&%\$#  
！！！！アタマガ割レソウダ！！！！！！！！」

頭が：割れる！！知らない“はず”の情報。今現在行われているであろう会話。動作。キャラ作成。ハッキング。トレード。過去行われたであろう戦争、戦い、データドレイン、碑文使い作成  
なにより  
1万2千の感情

ツ！！！！死ぬ！！！！死んでしまう！！！！！！

地に伏しもがく

それを、姉さん！！と泣きながら抱きしめに掛かるアイナが見える目を見開きそれでも落ち着けさせようとするオーヴァンが見えるいや、見えていない。そう解る……

視覚情報はどこかの情報が流入開始してから死んでいる

私は痛みに耐え切れなくなり。“何”かを切った  
ブツン。と言う音と共に私に流れてくる“モノ”は消え私の意識も  
また途絶えた

その日、『The World』にて原因不明のサーバードウンが  
起きた。併発するように一人の少女が意識不明により病院に搬送さ  
れる

## 覚醒・微（後書き）

うむ。これは微妙にネタを察してしまう人も出るでしょうが。黙認  
していただければありがたい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2698d/>

---

.hack//G.U.-降誕-(.hack//G.U.)

2010年10月10日22時00分発行